
Chasing as ...

かわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Chasing as …

【Nコード】

N4256Z

【作者名】

かわ

【あらすじ】

喧騒を外れた中庭での再会 連作のため短編集から独立させました

はしやぎざわめく人並みを外れて、俺は一人校庭の隅に移動する。既に日が落ちた広い校庭は、それでも夜とは思えない明るさに照らされていた。

何の変哲もない学校の変わり映えのない月末の夜。本来ならばとうに下校時間を過ぎていている頃合いだが、この高校の唯一の特徴とも言える校風のためにこの騒ぎは容認されている。

この私立校を建てた主は幼い頃から海外で育つたらしい。成人する頃にはもうこちらへ戻ってきて久しかったようだが、三つ子の魂百までとはよく言ったものだ。刻み込まれた生活習慣は年月を重ねても消えずに残り、帰国してからずっと窮屈な思いを強いられてきた影響か、ここの校風には彼の愛する自由とやらが大きな顔で蔓延っている。

そしてそれを助長しているのが交換留学生の存在だ。一学年で高等部では十人前後、中等部でも五、六人もいる彼ら彼女らによって持ち込まれた母国の風習は、刺激に飢えている在校生のかっこうの遊びとなったのだ。クリスマス然り、バレンタイン然り、ハロウィン然り……。

中等部の頃はそれなりに楽しめもした。聖堂のステンドグラスもパイプオルガンの音色も、キューピッドの仮装をした滑稽な生徒の催しも、高等部に進学した今、目新しさはない。けれどそれとは別に参加すらしなくなった理由が俺にはあった。

元々騒ぐよりもそれを傍観している方を好む性質だと自覚はあった。一緒に行動をする仲間たちからも常に一步退いてなりゆきを見ていた。勿論それを悟られないよう、調子を合わせもしていたが。

けれどたった一人、そんな俺の偽りを見抜いた奴が、いた。

そいつは他の奴らのようにただ青いだけの眼ではなく、光の加減

でうつすらと紫を帯びたように見えることがあった。そのほかにこれと言った特徴の浮かばない、おとなしい奴と言った認識だった。いや、おとなしいどころではない。陰気で根暗な奴だと思っていた。そいつが俺以外の誰かと話をしているのを、ただの一度も見た覚えがなかったからだ。はじめのうちは互いに何の興味もなかったはずだ。俺は当然のように面白みの欠片もない奴に目も合わせなかったし、奴も俺の知る限り常に俯いて呆とするばかりであったはずだ。知り合うきっかけとなったのはほんの些細な、けれども俺たちにとって何物にも代え得ないできごと。

それを境にあいつは姿を消した。

正直、それが俺にどれ程の衝撃を与えるのだと侮ってさえいた。限られた僅かな時間のみ同じ空間に存在していた。たったそれだけの相手が突然いなくなったとしても、それは中等部の頃から体験してきたことだ。違うのは代わりとなる人間が現れなかったことだけ。そんなことは今までとて気にしたことはなかった。個が変わろうが全体は何も変わらない。俺の周りにさえ影響がなければ仮面を纏い、一人高みに立って周りを観察し続けることに何の影響もなかったのだ。

なのになんだ、この、感覚は。

仲間同士で話していても、他の誰を観察してみても満たされない。脳の一部が、感覚が、備わっていた機能の何かが欠如してしまっただかのような、そんな心地悪さが絶えず襲ってくる。

ソレを持って余すようになつた俺は徐々に不快感を募らせた。何をしても、何をされても満たされない。水を欲してやまないのに、目の前に大きな湖があるというのに、今一步のところでは手に入らない。手に入れて口に含んだとしても、とたんに肉体が消失して骨だけの体になって受け止める臓器をなくしてしまったような。

欲しい。なのに手に入らない…。

俺は初めて執着と言う衝動を覚えたのだ。

明かりをそれていく俺を気にかける存在はない。いつの間にか消えてその他の一部になってしまっていた。

けれど俺にはもう、どうでもいいことだった。求めているのはそんなものじゃない。ソレは、この先にこそいる。

ソレに引き寄せられるように足を進める。もう光も届かない、暗闇の跋扈する植え込みを越え、その更に奥にある中庭を目指す。

間違いなくそこにいるはずだ。他でもない、今日この日だからこそ、いないはずがない。

本来人が通る場所ではないため雑多な草の生い茂る道を苦労して進む。行く手を遮る枝を手で払い、幾歩も行かず立ち止まる。

見間違える筈がないその場所に確かに目指したものを見つけたそのとき、俺の中に今まで味わったことのない、体が震えるほどの衝動が駆け巡った。

「久しぶり、だね…」

「…」

「…怒っている、の？」

「…」

「だって、元は君が悪いんじゃない」

こいつにしては勇ましいセリフだが、震える語尾が怯えていることを示す。

俺は言葉を返さずに、ゆっくりと一歩ずつ距離をつめていく。

「できるものならやってみるって。でなきゃ何をするかわからないって、そう脅しつけたのは君でしょう…？だから」

俺が進むに合わせて後退していた背中が木に触れて止まる。

すかさず残りの距離をつめて奴の逃げ場を奪うと、声音同様に怯えた眼が俺を映す。辺りは暗く、外灯さえない中でそれがわかるのは、こいつ自体が淡く光を帯びているからだろう。

「だから証拠を見せたんだらう？俺の感情の一部を切り取って」

「…悪かったと思ってるよ」

「そんなことはどうでもいいね。それより何故いなくなった？俺の一部を持ったまま俺の前から消える必要まではなかっただろ？」

「……」
俺の代わりに黙り込んで、視線すら外した奴に、俺はイライラを逃がすように盛大な溜息をつく。するとびくりと肩を揺らしてボソボソと言葉を落とした。

「本当に、悪かったと思ってるよ。脅かされたからってやっていいことじゃなかった。これは返すから、お願いだからもう怒らないで。そう言っただけあげた手のひらの上にちよこんと小さな箱のようなものが乗っていた。一見してなんでもない箱だが、それには開け口も切り目も無く、薄っすらと光を帯びて見えた。

あの時俺から切り取られた感情の欠片。確かにそれは俺の内面を映し出したような歪んだニビ色をしていた。

俺が失って、身も背もなく求めたもの。

伸ばした手は箱を通り越して奴の青白い首筋を掴む。

「お前、こっちに戻ってくるのか」

問いかけた声に返されるのはただ戸惑うばかりの視線。

構わず続けた声に今度こそ言葉が返ってきた。俺が望む、

「もう、戻れない」

是とは逆の応えが。

どこかで予想していた応え。けれど予想外の衝撃を齎す応え。

「…それならそれはいらぬ。煮るなり焼くなり好きにしろよ」

「そんな、駄目だよ！受け取ってくれなきゃ困る…！」

「俺の望みが叶わないのに、お前の望みを叶える義理はないね」

口元だけを歪めて言い放つ俺に、奴はヒクリと喉をつめる。

それを見て、確かに俺の中に何かが浸透していく。

「俺は死に際まで、絶対受け取ってやらないからな」

広く浸透して行くもの、それは決して悦びではない。それは、俺の歡喜は奴の手の中に収まっている。

だからこれは支配欲だ。

求め求めて、いつしかすり替わってしまった求めるものを手に入
れたいと願う感情。

元々青い顔から更に色が消え、涙すら浮かべたこいつは、余程の
ことがない限り俺に箱を返すまで消えて逝くことは出来ないだろう。
それは少なくともこの一年で立証されている。

期限はおおよそ一年。その間に奴に新たな未練を植え付けてやれ
ばいい。

俺が未知の感情を手にしたように、きっとずっと変わらないもの
なんて何一つ無いのだから。

t r y s t (後書き)

(2007/4/9)

Tag(前書き)

tryst の数年後。やり取りの終着点

「君は、ほんとうに嘘ばかりだね」

響いた声音に一瞬、まるで木偶のように体が硬直する。

聞き違えるはずのないその声にまさかと思い、同時に疑念が浮かぶ。何故今この場所にいるのか、あの日以外には一度として姿を見せなかったと言うのに、何故。

驚いて振り向いた先には見誤るべくもない、あいつが、いた。

翳した手さえ見えない深い闇の中、やはり淡く体を発光させ俯いた様を露わにするあいつに俺はゆっくりと近付く。

「君は、ひどい嘘つきだ」

俺を素通りする全く威力のない言葉を投げつけられながら、それでも俺は言葉を返さずにゆっくりと一歩ずつ距離をつめていく。

いつかも同じように近付いた、湧き起こる既視感。けれどあのと
きと違い、あいつは俯いたまま後退りはしなかった。

一歩、また一歩と確実に歩を進める。しかし一向に縮まらない距離に自然と早足になり、それでも全く進む気配のない暗闇にだんだんと焦りが募るのが嫌でもわかった。

「ときが来たら受け取ってくれと言ったじゃない。なのに」

「受け取るなんて一度だって言ったことねえよ」

そんな俺など気にも留めず放たれた言葉にいらついで乱暴に返した俺に反応し、ようやく俯いた顔をあげた。

久々に見るその顔に浮かんだ表情に、渦巻いた苛立ちが引いていくのがわかった。

「だって」

「俺は死に際まで受け取らないと言っただけだ」

「それは!…」

らしくなく途中で止められた言葉。

今日はらしくないことばかりだ。突然目の前に現れたり、こうして

言葉を断ち切ったり。理由を模索するうちに、そう言えばここはどこなのかと疑問に辿り着く。この暗さはどこかの室内だろうか。けれど家を出てからどこか建物へ入った覚えはないが…。

「君にはわからないよ」

考えを読んだかのようなタイミングで言われたそれに、思わずあいつをまじまじと見つめる。

辛そうな表情で、けれど屹と差し出された手。小さく震えるその手に握られているのはあの箱だろうか。

「これが！君をそこに引きとどめてるんだ…っ。これがないと君はどちらにも行けないんだよ。だから、お願いだから…っ」

小さく呟かれた声は届かなかった。けれどそれが何かなんて考えるまでもない。何故ならそれは幾度会っても飽きずに投げかけられる言葉だろうからだ。

泣き崩れ、蹲ったあいつを馬鹿だと思う。そんなあいつに執着し続ける俺の方がもっと愚かだ。それでも、

「何度言われても俺は俺を通すぜ」

あいつにとっては無情だろう言葉を、変えることなく投げ放つ。

何度言い募られようと俺は同じ応えだけを返す。そんな俺に、あいつは決まって傷ついたような苦しいような、複雑な表情をする。

そうしてしばらく口を噤んでは諾々と主張を呑み込むのだった。

それがこれまでの一種決め事のような流れのはずだった。

けれど。

本当に、らしくないことばかりだ。

俯くことなく、傷つくでもなく向けられたその表情は、なん、だ
ろうか。

「わかった」

静かに立ち上がったあいつは、引き寄せていた拳を再び差し出す。

その目に映るのは、

「君が君を通すなら」

それは

「僕もそうさせてもらおう」

言葉と同時に開かれた掌からソレは勢いよく飛び立ち、俺を飲み込んで彼方へと飛んでいく。

「……っ！」

「さよなら、ときわ」

飲み込まれたまま駆けるソレに為す術はなく、もがいた所でその速度すら落とすことは叶わない。

さよなら、と。そう言ったあいつの表情も、その後囁かれた言葉の端も、意識をなくしつつあった俺には何一つ確かめることは出来なかった。

通い慣れた道も間が空けば息切れの一つもする。ましてろくに動くことすらしてなかった体なら尚更だ。

ゼイゼイ息を喘がせて、それでも止まることはせず俺は目的の場所へ向かう。杖をつきながら整地を施されていない道を歩くのに、再び多量の時間をかけた。

俺のしていることは無駄なのだろう。けれどそれがわかっていても尚、持て余すこの感情が俺を突き動かすのだ。

水が形を求めるように、枯渴した個が拠り所を求めるように、そうしないではいられないのだ。

還された感情ではない。これは、喪つて培った感情だ。

辺りは暗く足場の悪い道に何度も転倒するが、休むことなく歩き続ける。やがて見えてきた見覚えのある何の変哲もない景色に、けれど現実を目の当たりにして足を止めた。

毎日は叶わずとも、この日、このときだけは僅かながら約束された邂逅、だった。

「嘘つきはお前だ」

ゆっくりと、いつもあいつが立っていた辺りに向かう。

同じ場所に立って、あいつがしていたように空を見上げる。それでも俺にはあいつが何を見て、思って、感じていたのか、少しもわ

からなかった。

「あれから、嬉しいと感じたことなんて、一度だつてない……」
埋まったはずの空洞は、新たに生まれた空虚へと塗りつぶされて
行った。

いつか不変のものはないのだと思った。

かつて体感を経て達したその答えに、もしまた行き着いたとした
ら。

そのとき、この空虚さえもが埋まるのだろうか。

あいつへの執着が断ち切れない俺には、まだその答えを、見つけ
られない。

Tag)後書

2007/4/10)

x x x

喧騒から外れた薄暗い校舎の通気口に目的を見つけ、其の元へ歩を進める。

「ね、あっち行かないの」

「……」

「みんな待ってるしさ、行こうよ。ね」

「……」

無言。無言。…無言。

「ああもつ」

思わずこぼした歯がゆさにも、同じものが返る。

「あれで良かったって言ったじゃない。あんただって、今までよくやってきたじゃない。なのに何でそんな顔してるの」

無言。それは変わらず、ただ耳をふさぐように、視界をふさぐようにすべてを拒絶するのが雰囲気からわかる。

そう、わかる。わかってしまうのだ。それが私たちの全てで、それがなければワタシタチとは呼べなくなるから、嫌でも伝わる。

聞く耳がないとわかっていても、言わずにはいられず独り言のような虚しさを抱きながら、私は力もたない言霊を放つ。

「いつまでも同じようにはできなかつたって、あなたにもわかっていたでしょ。それに、あんただって望んでいたことじゃない。なのにいざ手放したらその様？」

落ちる無音は張り詰める。けれど私も、言わずにここにはいられないのだ。

「いいかげん、受け入れな。ずっとこうしてはいられないんだ」

「そんなことない」

返った言葉を、それでも私は否定しなければならぬ。

「ある。ここにいたら遠からず縛られてしまう。そうなったらあなたは別のものになっちゃうってわかってるでしょう？」

それでも、と返る言葉の続きを、私は知っている。いや、識っていた。

それは当然の言葉で、だれしもが縋りたく思う唯一の糸で。…けれど決してその先に光はないのだ。

だから私は言わなくてはいけない。その望みをこの瞬間に絶ち切つてやらねばならないのだ、この私が。それが其のためであり、彼のためであり、私の定められた勤めなのだ。

ひとつ息をのみ、彼の心をここから…いや、彼と彼を縛るものから切り取らねばならない。それが一番正しいことだとわかつてはいらぬ。けれど私はいつもこの瞬間が悲しくてならない。

彼らは彼らなりに大切なものがあり、想うものがあり、捨てられないものがあるのだと識っている。私もかつてそうだったように、彼らにとつてそれは抜け殻を捨てた今でも己を構成する細胞にすら感じるのだ。

それを捨てるとなれば、今となっては言葉通り、身を裂く痛みを味わう事と同じ。けれどそうしなければ私も彼も、己ではいられないのだ。

かつて私のものでもあつた痛みを追体験しながら、飲み込んだ息の代わりに、私はその残酷な言葉を解き放つた。

カレラのなれの果てを何度も見てきた。その中の一度、私が情に負けてしまった故に墮としてしまった想いへの贖罪のため、私は勤めに殉じている。

私たちは影送りされた残像のような存在だ。

切り離されたのはその姿形ではなくて、かつて己を構成していた感情そのもの。故に篤く脆く、頑迷なまでに己を貫く。けれどそれ故、渦巻きもすれば見失いもする、ひどく曖昧で不確かなしたたかさを併せ持つてもいた。

善きも悪しきも、私たちには想いだけが詰まっている。

だからこそ、彼は抱えてしまった箱の主に感化されてしまったの

だろう。失ってしまった私たちには、失う前のそれはあまりに強烈で鮮烈だ。

生きた想いに彼が何を感じたか、私にはわからない。

それを感じるために、私たちはまた一から始まりの光を追い始めるのだ。

だからどうかどうか、彼に、

「このえに優しい始まりがそそがれますよう」

留まるも逃げるも暗くあっても道の一つ。闇に隠れた光の道を灯すために、私は贖いの路を行く。

そして願わくば、彼の痛み先端にいた者も、彼と同じ気持ちであつたことを…。

××××(後書き)

2009/04/05)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4256z/>

Chasing as ...

2011年12月18日00時49分発行